「巨匠」の自画像をものしたモンペリエ滞在で海に開眼した画匠は、《法話の帰り道》をサントで制作した折、近傍のロワイヤンで「海の風景」を描く。政治風刺と海景への没入とは、表裏一体。友人の詩人ボードレルは海を描く画家に「気象学的」観察眼を認めたが、クールベの「海の風景」は、政治に劣らず奔騰する波浪、暴風雨と快晴との転変や振幅を、絵筆とパレットナイフで画布に定着する営みだった。

近年の作品研究は、精緻化とともに主題毎に細分化される傾向が否めない。だがそもそもクールベの本領は、既存のジャンルの垣根を跨ぐ脱法的侵犯から利鞘を稼ぐ狡知にあった。1863年前後からの「狩猟画」や「海景画」への転進と画業の「穏健化」。「商業市場」に迎合する「変節」ないし「墮落」。加えて画家没後の批評界は、画家晩年のコミュンへの加担を払拭した「純粹藝術家」像の確立と、社会主義的前衛の復権との二者択一に翻弄された。研究史そのものも、第二帝政崩壊から第三共和政確立への体制断絶の煽りを受け、同様の右往左往と右顧左眄を反復・増幅してきた。そうした批評史と研究史との共犯関係も、三名の最新研究は見事に浮き彫りにする。

狩猟画に秘められた神話的寓意や政治的暗喩は、自然主義の画題が長らく覆い隠してきた。「純粹藝術家」像が隠蔽してきた政治関与の解明が、今こそ要請されている。

*日仏美術学会・若手シンポジウム「クールベ研究の現在 新しい解釈・源泉・その政治性」(同志社大学、2024年7月28日実施)会場での筆者の即興のコメントの内容を要約する。言及した研究者3名の論考は、日本美術史学会刊行の『美術史』や『日仏美術学会会報』ほかの専門学術誌に掲載されている。

どうした皇帝・ナポレオン三世のメンツを潰し、かえって世間の注目を惹く僥倖を期待できる一挙両得。だが、となれば？ 按ずるに、翌年の《ヴェヌスとブシケ》は、作戦を後退させた妥協策だったのでは？ こちらはサロン審査員の欲心を買う譲歩を図りながらも、それがクールベの意図には反して、功を奏さぬ惨敗を招いたのだから。

山枍あおい氏はクールベ同時期の狩猟画に注目し、それを画家周辺の思想動向や社会的事件と適切に結びつける。注目したいのが《密猟者》(1867)。狩猟法厳罰化に伴い、密猟は社会正義を希求する反権力思想と結託した。クールベの超大作《画家のアトリエ》(1855)の画面左端の「密猟者」は1978年にエレヌ・トゥッサンが写真肖像との酷似から、皇帝本人に他ならぬと断定し、議論を呼ぶ。皇帝を密猟者呼ばわりしたのでは名譽毀損、只では済むまい。だが皇帝その人が社会改革を標榜していたのなら、体制転覆・政権篡奪の「密猟」呼ばわりも、褒め言葉だったと言い訳できる？ 他方、狩猟の獲物となる見事な牡鹿は、気高い動物と見做され、政治的迫害の犠牲者たる反体制派の画家自身の隠喩と解釈されてきた。

となると、どうか。自らも密猟で検挙されたもしたクールベは、不倶戴天の敵・対峙する皇帝陛下と「似た者同士」、近親憎悪の鏡像関係となる。実際、《法話の帰り道》も、クールベが自身の落驢の失態を神話画に糊塗し、敵方の司祭の酔態へと変装・転嫁した擬態mimicryだった。曾て本稿筆者が解明した事実だが、ならば同様の、敵方への淫靡なる「転移」、逆転攻勢が、大作《鹿狩りの仕留めの合図》(1867)にも密かに仕込まれていたのでは？ 按ずるに、巨大なる犠牲獣は、帝政瓦解への希求をも暗喩し得た筈では？

高野詩織氏はその山育ちの密猟者クールベが、広大な大海原と対峙する姿勢を

連載
神話・狩猟そして海
ギュスターヴ・クールベ再考にむけて

稲賀繁美
京都精華大学教員、
放送大学客員教授

写実主義絵画の覇者、ギュスターヴ・クールベ。「オルナンの巨匠」とも呼ばれるこの画家(1819-1877)について、近年、日本の若手研究者による探求が画期的な成果を見せている。写実主義とは、従来の新古典派の神話画や歴史画への反逆であり、クールベは先行するロマン主義の主観的表現から出発しつつも、二月革命で政治的な前衛へと覚醒を遂げる一方、その無垢な自然探求は、次世代の印象派の風景画への先鞭をつけた、とするのが通説だった。

だがこうした従来の教科書的整理は、暗黙の発展史観に拘束されている。むしろそこで何が見落とされ、なぜそうした見落としがまかり通ってきたのか、解明されねばなるまい。

天王寺谷千裕氏は、クールベが単純に神話画を放棄したどころか、むしろ神話的寓話を下敷きにしつつ、それを巧みに換骨奪胎して自らの新境地を開拓した機微に探索を進める。問題とされるのは《ヴェヌスとブシケ》(1864)。ルイ十三世の宮廷首席画家・シモン・ヴーエらの神話形象を下敷きにした点の解明は論者のお手柄。前年のサロンでは、国立美術学校教授らの筆で砂糖菓子よろしく仕上げられた裸体女神のヴェヌスたちが人気を攫う一方、落選者展では新進のエドゥアール・マネが《草上の昼食》で醜聞混じりの話題を撒いていた。それを横目に睨んでいたクールベの敵愾心・対抗心も、レスピアン関係を示唆する際どい図柄の選択の裡に、想定できる。だが「女性習作」としてサロン出品した本作は落選する。

その前年、クールベは《法話の帰り道》(1863)で一計を案じていた。カトリック聖職者が白昼の公道で泥酔する醜態を揶揄する、露骨な反宗教画。主題柄、サロン落選は当然として、風俗壊乱ゆえに落選者展からも排除となれば、落選者展の主旨に悖る事態となる。温情措置で点数を稼